村上三大祭りの行われる三つの神社の描く二等辺三角形による都城計画に関する研究
―上杉謙信と大國但馬守実頼による都城の構想―

深澤　大輔*

（平成 21 年 10 月 30 日受理）

Research Regarding the Tojou Plan by the Equilateral Triangle
3 great fete and the three shrine in Murakami
―The idea of Tojou by Kenshin UESUGI and Saneyori OHOKUNI―

Daisuke FUKAZAWA*

Saneyori OHKUNI planned tojou where imitated the Fujiwara capital in the paddy field area, of all over NANAMINATO where establish the shrine metropolis in MATSUYAMA of MURAKAMI where governed from UESUGI and be able to look over from there.

Key words：Tojou plan，Murakami-shi，Ohkuni saneyori，Middle age ，Saint figure

1.　はじめに

我が国では、藤原京から平安京に至る都城計画は、中国の長安(現西安)における碁盤の目状に道路を整備し、その中央の朱雀大路の北に宮都を配する形を模して行われてきたとされている。ところで、平城京の場合、元明天皇の平城京遷都の詔(708 年)に「平城の地、四禽(しきん)図に叶い、三山鎮めをなす」とある。鎮めをなす三山とは平城京の場合、北の奈良山丘陵、東の御笠山、西の生駒山などいろんな見方があるが、藤原京の場合、奈良県(旧・大和国)の奈良盆地南部、飛鳥周辺にそびえる耳成山(みみなしやま)・畝傍山(うねびやま)・天香具山(あまのかぐやま）という 3 体の山々の総称である。この三山は、耳成⇒耳鳴り⇒地鳴り⇒地震、畝傍⇒うねぶ⇒うねる⇒波⇒洪水、天香具⇒香⇒風⇒台風という 3 つの自然災害から藤原京を守るために築かれた山と考えられる。三山は三角形を描くが、その頂点から各辺の二等分点を結び延長線を引くと、耳成山からは四天王寺(聖徳太子創建)、畝傍山からは葛木山(役之小角：我が国最初の行者)、天香具山からは高松塚古墳(忍壁皇子、高市皇子、弓削皇子ら、天武天皇の皇子の内の誰かが被葬者)に当たり、それらの線は交点を結ぶ。そして藤原京の宮都は、その交点からやや東に外れた畝傍山と葛木山を結ぶ線上に位置することが分かる。これと同様に、平成 16 年 7 月 13 日の集中豪雨で刈谷田川が氾濫し大きな被害が発生した中之島と反対の右岸側に、諏訪神社と神明神社と念故

*　　建築学科　教授（Department of Architecture and Engineering, Professor）

寺が三角形となるが、神明神社と神明神社、念故寺と願勝寺山門、諏訪神社と鞍掛神社を結ぶと交点を結び、永開寺がやや念故寺側に願勝寺山門と結ぶ線上に並ぶ。詳細は、不明であるが、これは刈谷田川の水害が頻発する江戸時代に今町の形成過程で完成したものと推察される。

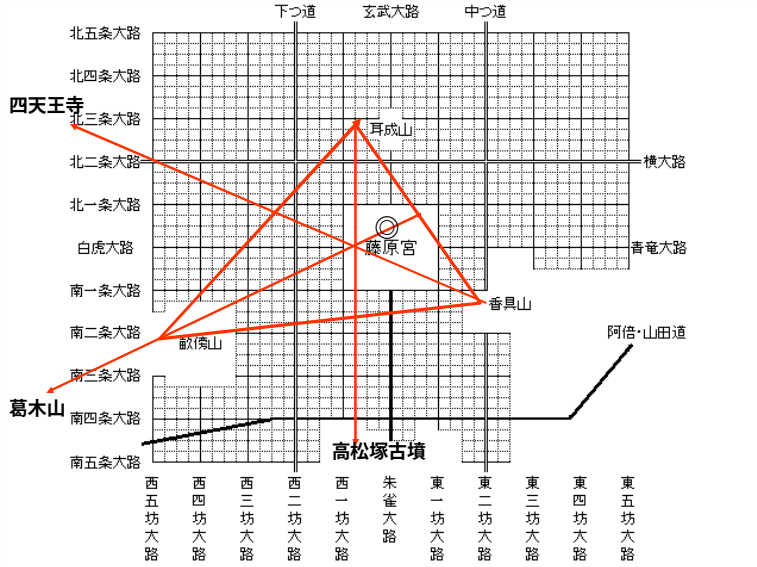

図１　藤原京における三角形と宮都とその都城計画

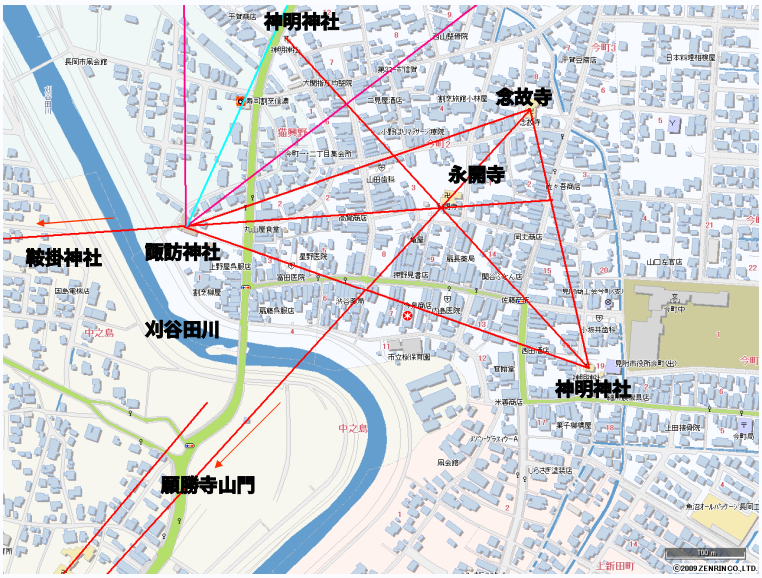

図２　見附市今町における三角形と刈谷田川の水害の鎮め

これらに対し、新潟県村上市では村上三大祭りと称される村上大祭の行われる羽黒町の西奈彌羽黒神社、瀬波大祭の行われる瀬波浜町の西奈弥神社、岩船大祭の行われる岩船三日市の岩船神社は、式内社の岩船神社を頂点とする南西向きの二等辺三角形となっている。また、西奈彌羽黒神社と伊夜日子神社、西奈弥神社と大山祇神社、岩船神社と京都の貴船神社を結ぶ線は交点を結ぶ。そして、岩船神社と貴船神社を結ぶ線上の交点から西側の岩船神社との間に三日市の飛び地が三箇所あり、そこから大山祇神社のある広大な土地は現

在新飯田であるが、瀬波郡絵図を見ると上杉景勝家臣の大國但馬分とされている。西側は日本海が拡がり南側はかつて広大な内海であったが、現在は水田となり、それが見渡せる。

この村上における図形が完成した過程を辿ることで、成立した時期と場所と人をかなり特定することができたので、以下時系列に整理して見ることとしたい。

2. 方法

村上三大祭とされている村上大祭(19 台)・瀬波大祭(5 台)・岩船大祭(9 台)のおしゃぎりの数が合計 33 台であることから、それがいつ頃から始まり、現在の数となったかを探ることから出発した。その過程で様々なことが出てきたので、時系列的に成立順に史実を整理し考察して見ることとした。主要な参考文献については巻末に示したが、歴史的な様々な事項については、インターネットのフリー百科事典『ウィキペディア(Wikipedia)』等で検索した内容を引用した。地図は、ゼンリンの電子地図帳 ZiPROFESSIONAL7 と市販されている昭文社の村上市を使用した。大阪の聖徳太子の建立した四天王寺と鶴岡の空海が建立した大日坊(地滑りで移転する前の創建時の位置)を結ぶとその線上に岩船の岩船神社が位置する等は、これまでの知見では偶然としか考えられないが、本稿ではこのように離れた箇所でも「鬼門－裏鬼門」「三点一直線」となるように位置決めが出来ていたとの前提で検討することとする。また、そのような整理によって得られた推察は、「⇒」で示した。尚、今回登場する社寺は、殆どこれまでに訪れ、写真撮影等を行っているが、詳細は省略する。

3. 羽黒三山神社の草創

出羽三山を開いたのは能除仙で、別名を蜂子皇子(崇峻天皇の第三皇子)で、羽黒山は崇峻元(588)年に能除仙により開かれた古い具体的な歴史を持つ山岳信仰の山とされている。能除仙は三本足の烏の導きで、出羽の山に入ったと言われているが、崇峻天皇 5(592)年 11 月 3 日に、蜂子皇子の父、崇峻天皇が蘇我馬子により暗殺されたため、蜂子皇子は馬子から逃れるべく丹後国の由良(現在の京都府)から海を船で北へと向った。そして、現在の山形県鶴岡市由良にたどり着いた時、八乙女浦にある舞台岩と呼ばれる岩の上で、八人の乙女が笛の音に合わせて踊っているのを見て、皇子はその美しさにひかれて、近くの海岸に上陸した。八乙女浦という地名は、その時の八人の乙女に由来する。蜂子皇子はこの後、海岸から三本足の烏(ヤタガラスか？)に導かれて、羽黒山に登り羽黒権現を感得し、出羽三山を開いた。この羽黒三山神社から南西の裏鬼門方向を辿ると、瀬波の伊夜日子神社を通り、更に伸ばすと聖徳太子が建立した大阪の四天王寺の金堂に当たる。

- 欽明 23(562)年　蜂子皇子、誕生。
- 用明元(585)年　蜂子皇子、聖徳太子の勧めにより宮中を脱出。
- 崇峻元(588)年　羽黒山が能除仙(蜂子皇子)により開かれた。
- 崇峻 5(592)年　蜂子皇子の父崇峻天皇が蘇我馬子に暗殺される。
- 推古元(593)年　蜂子皇子、由良の八乙女浦の海岸に着き、羽黒山を開山。
- 推古元(593)年　聖徳太子は摂津難波の荒陵(あらはか)で四天王寺建立開始。
- 推古 2(594)年　聖徳太子によって三宝興隆の詔が発せられる。

- 推古 3(595)年　　能除仙、3 年間崖下の岩窟で修行。羽黒修験の元になり、月山も開山。
- 推古 4(596)年　　聖徳太子によって法隆寺、竣工。
- 推古 7(599)年　　地震あり、舎屋悉く破壊される。よって、各地に地震神を祭らせる。(日本書紀)
- 推古 13(605)年　　能除仙、湯殿山に湯殿山神社を建てる。
- 舒明 13(641)年　　能除仙、羽黒で死去（享年 80）

4.　3 つの式内社の草創

平安時代の『延喜式神明帳』(927 年)に磐舟郡(今の村上市と岩船郡)には、石船、蒲原、西奈彌、荒川、多岐、漆山、桃川、湊と 8 座があったと書かれている。このことから岩船神社と西奈彌神社、湊神社は、約 1200 年以上の歴史を持つ、由緒のある神社である。

4.1　岩船神社

石船神社は、粟島に行く船が発着する岩船港の北約 500 m の石川の左岸の丘陵部中腹に鎮座している。磐舟郡８座の筆頭に記されており、大同 2(807)年に北陸道観察使、秋篠朝臣安人が下向のおり、京都貴船町より貴船明神を勧請して石船神社に合祀し、社殿を建立した。このため中世においては貴船大明神と号した。町の人たちが石船神社を「明神さま」と呼び、神社のある丘を「明神山」、神社の前を流れる石川に架かる橋を「明神橋」と呼ぶのはその時代の名残である。正徳 4(1714)年に石船明神に複合し、宣旨により正一位を授与され社殿を造営したが、中世以降、平林城主、ついで歴代の村上藩主の崇敬篤く、神領の寄進や社殿の修復が度々なされている。祭神は、饒速日命(ニギハヤヒノミコト)、罔象女命(ミズハメノミコト）、タカオカミノカミ、クラオカミノカミの四柱の神々である。罔象女命以下の三柱の祭神は貴船明神の神々であり、水を司るといわれている。

図 3　岩船神社とその周辺

ところで、山形県鶴岡市大網にある湯殿山総本山瀧水山大日坊は、寺伝によれば天長2(825)年に空海によって開山され、弟子である渡海を開基として開かれたと伝えられている。出羽三山参道のうち大網口に位置している。出羽三山神社では蜂子皇子を出羽三山の開祖としているが、大日坊及び注連寺では空海を開祖としている。大網の名は、湯殿山の本地仏である大日如来と月山の本地仏である阿弥陀如来を掛け合わせた「大阿弥」から来ており、地元では、大網を「空海によって聖地として定められ、清められた地」としており、湯殿山を高野山と対となる聖地としている。この大日坊は、昭和11(1936)年の地すべりの発生のため、約500 m程度西に移動し、現在の場所へ移転している。

この当初の大日坊と京都の貴船神社とを結ぶとその線上に岩船神社があり、鬼門から裏鬼門方向の三点一直線をなしていることが分かる。

4.2　西奈彌神社

西奈彌神社は、延喜式神名帳に記名された式内社であるが、その由緒については、気比神宮(越前国敦賀、敦賀港近く)の祭神、気比大神が渡海し、瀬波の地に上陸したことによると伝承されている。瀬波大祭の由来は、この伝承が基であるとされ、気比大神の瀬波への来航上陸を祝い、大祭では神霊をのせた御輿の後ろに渡海船に擬せられた屋台が続く行列が、瀬波の町内を練り歩く。気比神宮の例祭が毎年9月4日に行われている(気比の長祭り)ことから、瀬波大祭も同日に開催されている。尚、瀬波小学校の校歌に、「気比の宮居の千木高く瀬波の郡(こおり)と呼ばわりし」と歌われており、西奈彌神社は、明治の初めまでは、気比(けひ)神社と呼ばれていた。

何故、瀬波の高台にあるのか、この西奈彌神社と敦賀の気比神宮とを結ぶと、ほぼ鬼門－裏鬼門線となるが、西奈彌神社からこれと直行する天門－地門線を引くと粟島の小柴山に当たる。小柴山が「天」で、西奈彌神社が「地」と見られていたことが伺える。

図4　西奈彌神社とその境内

4.3　湊神社

湊神社は、村上市(旧神林村)にある式内社で、祭神は速秋津彦神と速秋津姫神の２神である。ＪＲ羽後本線・村上駅の南西1.5㎞ほどの七湊に鎮座しており、岩船港へ向う道路の北側、通称、七高山と呼ばれる30ｍほどの丘の上に境内がある。道路に面して境内の入口があり、少し入り鳥居を潜り参道の急な階段を登っていくと、社殿が見えてくる。社殿は、階段を上りきったすぐ近くに建っている。境内の左右奥に、境内社が二つずつ建っている。創祀年代は不詳であるが、鎮座地の七湊は、古代には岩船潟で、船の出入りする湊があった。社伝によると、昔は船入場という場所に鎮座していたが、天平年中(８世紀前半)の地震により流出しため、延暦年中(８世紀後半)に、現在地に再建されたとのことである。

図５　湊神社とその周辺

図６　伊夜日子神社とその周辺

以上の歴史について都城計画と式内社の成立前後の主要な事柄を年表的に整理すると以下の如くとなる。

- 大化　4(648)年以前　　岩船神社小祠建立。
- 持統　8(694)年　　藤原宮に都を移す。
- 和銅　3(710)年　　平城に遷都する。
- 天平　9(737)年　　諸国国分寺の建立を聖武天皇が発願した。
- 天平 13(741)年　　恭仁京に遷都する。
- 天平 21(749)年　　東大寺大仏を礼拝。
- 延暦　3(784)年　　長岡京に遷都する。
- 延暦 13(794)年　　平安京に遷都する。
- 延暦 23(804)年　　坂上田村麻呂が征夷大将軍に任命される。
- 大同　2(807)年　　北陸道観察使、秋篠朝臣安人が下向のおり、京都貴船町より貴船明神を勧請して石船神社に合祀。
- 天長　2(825)年　　山形県鶴岡市大網にある湯殿山総本山瀧水山大日坊が寺伝によれば空海によって開山された。
- 延長　5(927)年　　延喜式が完成する。これ以前に岩船神社小祠が磐船郡 8 座の筆頭になり、西奈彌神社・湊神社ができていた。同様に西奈弥山に伊夜日子神社と羽黒神社が創建されていた。

5.　上杉から実頼に渡った村上の領地で都城計画が浮上

5.1　上杉謙信が村上の所領を一部没収

臥牛山に初めて城が築かれた年代は定かではないが、戦国時代(16 世紀初頭)に、阿賀北の領主、本庄氏によって築城されたとみられている。当時は本庄城と呼ばれており、木柵で防御された中世式の城郭であった。永禄 11(1568)年に城主本庄繁長は上杉謙信に反旗を翻し、1 年に亘り籠城し、謙信に抵抗したが、伊達氏、蘆名氏の斡旋を受け入れ、嫡子顕長を人質に出し、所領を一部没収されることで講和を受け入れた。

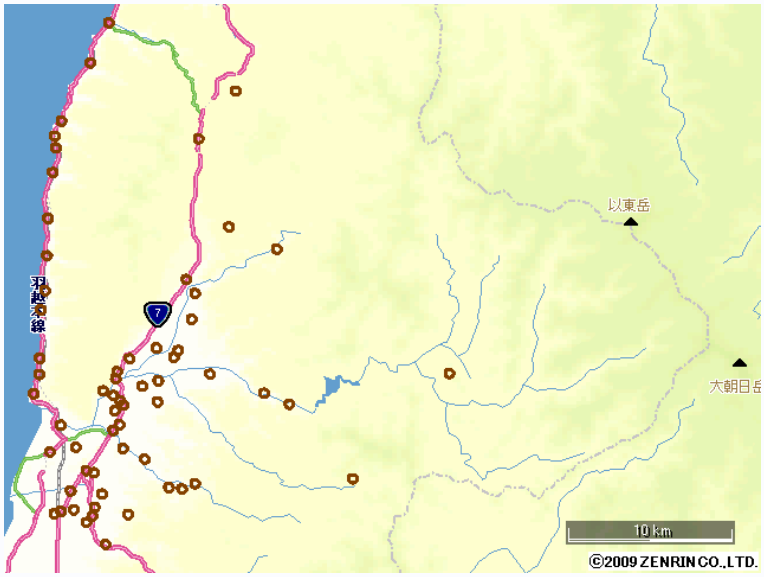

図 7　大國但馬分と書かれている村の位置

この時に没収された本庄繁長の所領が、文禄 4(1595)年の太閤検地に基づき、慶長 2(1597)年に画かれた瀬波郡絵図(米沢市市立上杉博物館所蔵)に大國但馬分と書かれている場所と推察される。絵図ではデフォルメされておりその位置が良く分からないので、描かれている村名を基に電子地図上で対応していると考えられる地名を探し、それぞれの中心から半径 250 ｍの円を描いてみると図 7 の如くとなる。

大國但馬分と書かれている村は、南は岩船のお幕場森林公園、北は日本海の笹川流れに葡萄川が流れ込む場所、東は三面川の如く、南北約 32 ㎞×東西約 27 ㎞と言う広大な領地の内、約 60 箇所の村に広がっている。詳細に見ると、それらは、七湊付近から北方向の水田地帯と現在の国道 7 号線東側の谷間集落、笹川流れ沿いの海岸集落に連なっている。

5.2　大國但馬守実頼による村上の都城計画

大國実頼は、安土桃山時代から江戸時代前期にかけての武将で、上杉氏の家臣であった。直江兼続の弟に当たるが、大国実頼の経歴などを年表としてまとめながら、村上に都城計画を構想していたのではないかとの考えを整理すると以下の如くとなる。

永禄　5(1562)年 0 歳　樋口兼豊の次男、上田荘(現南魚沼市)に生まれる。幼名は与七。

天正　6(1578)年 16 歳　上杉謙信死後の御館の乱で上杉景勝方として戦う。

⇒上杉謙信の「義の心」は天皇に対するもので、実頼(与七)もそれに従い、武士は天皇の思し召しの下で働くことこそが正義であると教えられて育った。

天正 10(1582)年 20 歳　景勝の命により天神山城主小国重頼の養子となり家督を相続。

天正 14(1586)年 24 歳　新発田重家討伐戦に参加し新潟城を焼打ちした。

豊臣秀吉の聚楽第新築のときには祝賀の使者を務めた。この時、従五位下但馬守に任じられ、景勝の命により苗字を大國と改めた。

⇒大國但馬守は、その時に村上にあった上杉の領地を景勝から拝領した。そして、天皇制の下における大きな国造りについて関心を持つようになったと推察される。

以後、頻繁に上洛し、木戸元斎と共に連歌会に多く参加したりした。

この頃、直江兼続は越後平野で信濃川が頻繁に洪水を引き起こすことから、自然水路(現在の燕市八王寺から旧中之口村まで約８㎞)の護岸工事を行い、現在の中ノ口川(直江川)の形を造った。しかしながら、その後も洪水は無くならず、江戸時代の中ごろ、改修工事を行い、中之口川と呼ばれるようになった。

文禄 4(1595)年 33 歳　瀬波郡の太閤検地が行われた。

⇒実頼は、現在の新潟市西区岩室付近の農地開発に限界を感じ、村上の湿原の拡がる七湊他の上杉から拝領した土地を見て回った???

慶長 2(1597)年 35 歳　瀬波郡絵図が画かれた。

⇒実頼は、村上要害の裏鬼門線と岩船神社と湊神社の両式内社とを結び延長した線との交点を聖地と捉え、浦田丘陵と七湊一帯を斑鳩の里の藤原京をモデルとする都城にする構想計画を立てた???

5.3　大國但馬守実頼による村上の都城計画

出羽三山神社は東国 33 カ国の拠点として蜂子皇子によって開かれたが、西国 33 カ国の京都に対して整備がされていなかった。実頼は、鶴岡の大日坊と岩船神社と京都の木船神社を結ぶ線が「鬼門 裏鬼門」で、「三点一直線」関係にあり、上杉の所領であった松山がその線上に位置することを知り、村上に都城を整備することを思い付いた。藤原宮はほぼ 1㎞ 四方の広さで、藤原京は 5.3 ㎞(10 里：9 本の大路がそれぞれ東西と南北に通されていた)四方で少なくとも 25 ㎢ あり、大和三山(北に耳成山、西に畝傍山、東に天香具山)を内に含む規模であった。これは正に村上三大祭が行われている 3 つの神社の描く三角形が入り、現在の岩船港の東側に拡がる水田地帯にすっぽりと納まる規模である。宮都の位置は、交点からやや東寄りの大國但馬守実頼が所有していた瀬波温泉に抜けるトンネルの上

図 8　大國但馬分と書かれている松山付近の絵図(瀬波郡絵図の一部)

図 9　新飯田の大山祇神社とその周辺

図 10　宮都が想定されたと推察される松山付近

の松山と称されている丘陵部であったと推察される。尚、この付近に岩船柵があったとされており、交点から岩船神社との間の線上に三日市の飛び地が三箇所ある。これについては、今後の解明を待つ必要がある。

実頼は、藤原京の都城計画に倣い、村上城の裏鬼門線と岩船神社と湊神社の延長線が交わる点(現在の西奈彌羽黒神社の位置)を聖なるポイント(聖地・三点一直線になる点)として比定し、その聖地と西奈弥神社と岩船神社が二等辺三角形になるように構想した。更に、岩船神社と大日坊（鬼門線)、聖地と伊夜日子神社とを結ぶ線がある中で、西奈弥神社からその交点(松山)を通る南北軸線上の南方向に大山祇神社を勧請した???　当時、瀬波と松山・小口は大國但馬分であったが、大山祇神社のある新飯田は出来たばかりであった。

以下、大國但馬守実頼が考えた都城計画のポイントがどのような順序でどの時代に完成したか年を追って整理すると以下の如くとなる。

・推古天皇元(593)年　第 32 代崇峻天皇の御子蜂子皇子(能除仙)　出羽三山神社草創。
・天長　2(825)年　空海によって湯殿山総本寺瀧水寺金剛山大網大日坊創建。
　⇒鶴岡の大日坊と岩船神社小祠と京都の貴船神社とを結ぶ「鬼門－裏鬼門線」完成。
・延長　5(927)年以前　西奈弥神社創建。
・延長　5(927)年以前　西奈弥山に伊夜日子神社創建。
・延長　5(927)年以前　西奈弥山に羽黒神社創建。
・永禄 11(1568)年　城主本庄繁長から上杉謙信が所領を一部没収する。
・天正 14(1586)年　大國実頼は、上杉景勝の命により苗字を大國と改め、その頃、村上にあった上杉の領地を景勝から拝領した。
・天正 16(1588)年　村上城主本荘繁長侯　西奈禰羽黒神社を庄内に移転。
・文禄 4(1595)年　瀬波郡の太閤検地が行われた。この頃、実頼は、村上要害の裏鬼門線と岩船神社と湊神社の両式内社とを結び延長した線との交点を聖地と捉え、浦田丘陵と七湊一帯を斑鳩の里の藤原京をモデル

とする都城にする構想計画を持った???

⇒岩船神社を頂点、聖地(西奈禰羽黒神社)と西奈弥神社とを底辺とする二等辺三角形、聖地(現 西奈禰羽黒神社)と西奈弥山の伊夜日子神社(元羽黒権現)との線が完成。

⇒「松山」を「宮都」とする都城計画の建設を構想???

西奈弥神社の真南の新飯田に大山祇神社を勧請し、聖地と伊夜日子神社、岩船神社と京都の貴船神社との線が、松山の西に交点を結ぶ形とした。

・慶長 3(1598)年　上杉景勝の会津移封に付き従って大國実頼は越後を去り、南山城代(2 万 1000 石)となった。⇒都城計画は一時沙汰止みとなった???

本庄氏も村上を去り、越後一国を秀吉から任された堀秀治の与力、村上頼勝が 9 万石で村上城主となった。西国の進んだ城郭築城技術に通じていた村上氏は、城の改築に着手した。

・慶長 5(1600)年　景勝が徳川家康との戦に備えて会津に神指城を築城しようとした時、兄の兼続と共に普請奉行を務めて功を挙げた。

⇒築城についての知識を豊富に得た!!!

同年　関ヶ原の戦い後、出羽高畠城 7,000 石の城代となったが、城には移らず上洛して伏見に滞留した。

⇒上洛して天皇中心の世とすることを思案し画策していた???

・慶長 9(1604)年　兄の直江兼続が本田政重との養子縁組を進めたのに対し、実頼は上杉謙信の「義の心」を守って村上に宮都を建設し、天皇を迎え、秩序ある国づくりを夢見ていた。しかしながらそれは思うように進まず、遂に伏見で刃傷事件にまで発展し、大國実頼は高野山に逃れる生活を余儀なくされてしまった。兄兼続の死後、密かに米沢近郊の中小松村に戻った。

・元和元(1615)年頃　村上頼勝か息子の忠勝が西奈禰羽黒神社を二本松に移転。

図 11　村上城本丸と西奈禰羽黒神社の境内

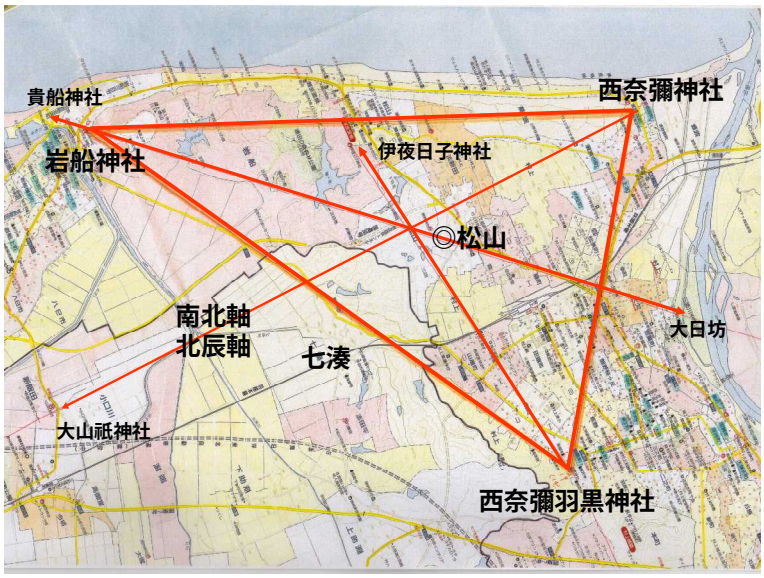

図 12　大國但馬守実頼が描いたと推察される都城付近

・元和 8(1622)年　　実頼が 61 歳で亡くなった。このため、都城計画の夢は消えた。

・寛永 10(1633)年の 6 月 7 日　堀直奇　西奈禰羽黒神社を羽黒町の聖地に遷宮。

堀丹後守直奇が臥牛山の中腹から現在の羽黒山に西奈彌羽黒山大権現を遷座させるに当たり、神伺いを立て、聖域として清めに清めて、漸く聖地とするのが許されたとされている。その境内からは七湊が見渡せるが、その時の村上城下絵図を見ると城外であり、その地への遷座には内部で大紛糾したことが伺える。

6.　三十三台のおしゃぎりによる村上三大祭りの成立

村上市三大祭りとは、村上大祭と瀬波大祭・岩船大祭である。村上大祭は、羽黒町にある西奈彌羽黒神社の例大祭で、毎年 7 月 6 日と 7 日、瀬波大祭は、瀬波浜町にある西奈弥神社の例祭で、毎年 9 月 3 日と 4 日、岩船大祭は、岩船三日市にある岩船神社の例大祭で、毎年 10 月 18 日と 19 日の如く、2 日に渡り行われている。

おしゃぎりの数は、3 つの祭り全体を合わせると 33 台に及ぶが、現在見られる最も古いものは江戸中期作成である。新しいものは、昭和 8(1933)年（2 台）・昭和 20(1945)年・昭和 62(1987)年に新造、平成 7(2000)年再建→平成 11(2004)年改造等、長い年月の中で造られ、村上三大祭りと称され 33 台になったのは、平成に入ってからと言え、新しい。

6.1　村上大祭

村上大祭は、江戸時代の初期、寛永 10(1633)年に、藩主堀直奇侯今の地に西奈彌羽黒神社社殿を造営し、臥牛山の元羽黒から御遷宮した時に御遷宮祭を執行したのがそもそもの起こりとされている。3 基の御輿に御神霊を奉還して、荒馬 14 騎、稚児行列を先導に町内を巡行する「御旅神事」である。19 台のおしゃぎり(屋台山車)は、彫刻を施し、村上伝統の堆朱・堆黒の粋を凝らした 200 年以上前のものもあり、正に絢爛たる美しさである。尚、奈津比売大神・倉稲魂大神・月読大神を乗せる 3 基の御輿は、寛文 9(1669)年に榊原家に

よって寄進されたものであるが、嘉永 5(1852)年に藩主内藤信親侯によって大修造された。更に、御輿は昭和 48(1973)年に古くなったので新調され現在に至っている。この御輿の巡行には、庄内町の少年が奉仕する荒馬 14 騎が前駆し、その後に 19 台の華麗なおしゃぎりが曳き回されている。ところで、村上大祭のおしゃぎりが 19 台になったのは、庄内町の仁輪加屋台が平成 7(1995)年に再建され、平成 11(1999)年にしゃぎり屋台に改造され、「瓢鮎図」と言う乗せ物が新調された時で、それ程古くはない。これは、村上市に本籍のある小和田雅子様が、平成 5(1993)年に皇太子妃になられたことから、村上ではその祝賀ムードが高まり、庄内町は、天正 16(1588)年に村上城主本荘繁長侯が西奈禰羽黒神社を、この地方の総鎮守として祀られた由緒ある町内なので、町民が協力し村上大祭を盛りあげるためにおしゃぎりを復活させたものと推察される。

6.2　瀬波大祭

西奈弥神社は、延喜式神名帳に記名された式内社である。瀬波大祭は、気比神宮(越前国敦賀)の祭神、気比大神が渡海し、瀬波の地に上陸したことによると伝承されている。大祭は、9 月 3 日の夕におしゃぎりが各町内を引き回される宵祭りから始まる。本祭は、9 月 4 日の朝から開始され、各町のおしゃぎりが町内を曳き回された後、9 時頃に西奈弥神社前に整列し、神霊を御輿へ移す神事が行われ、10 時頃、御輿を先頭に 5 台のおしゃぎりが並ぶ渡御行列が開始される。おしゃぎりの先頭は、気比大神を乗せるお船様の浜町のものである。行列は囃子に合わせて唄を歌いながら、各町内を夜までかけて練り歩く。21 時頃、浜町に集合したおしゃぎりが、浜町の坂を次々に駆け上がり、大祭は終了する。

学校町の屋台は、昭和 62(1987)年に造られた仁輪加で、それまでは 4 台であった。

6.3　岩船大祭

岩船大祭は、神様が「石の舟」でこの地にお越しになったと言う伝説に由来する。また、この祭りは「舟囲い」とも言われ、その年の海の恵み、山の恵み、あらゆる生業に感謝するこの地方の一年を締めくくる秋祭りである。10 月 18 日が宵祭で、10 月 19 日が本祭ある。9 台の車切屋台が岩船神社を起点に曳き出され、街中を練り歩くが、さすが圏域の玄関口として栄えてきた港町と思わせるのは、行列の先頭を行く「御舟屋台」である。拝殿から大鳥居まで若衆に担がれ、参道の階段を下り、屋台に移される「御舟」は漆を何回も重ねて朱色に塗った豪華なものである。人々は「木遣り唄」に合わせ、玉槍、御神輿、おしゃぎり屋台(9 台)が町中を練り歩く勇壮なこのお祭りは、沢山の提灯の明かりに揺られながら、去りゆく季節を惜しむかのように「ともやま」行事が終わる夜遅くまで続けられる。尚、おしゃぎりは、凡そ 260 年前は 2 台で、江戸時代半ばになって現在の 9 台となった。

7.　大國但馬守実頼の村上都城計画(まとめ)

大國但馬守実頼は、上杉謙信が手に入れていた土地を、上杉景勝から小國姓を大國姓に変えるように命ぜられた折に、景勝から拝領したものと考えられる。

聖地(西奈禰羽黒神社)と西奈弥神社と岩船神社の 3 つの神社を直線で結ぶと、岩船神社を頂点とする裏鬼門向きの綺麗な二等辺三角形が描かれる。また、京都の貴船神社と岩船神社、西奈禰羽黒神社(聖地)と伊夜日子神社を結び、その交点に西奈弥神社から南北線(北

辰の軸)を引くと新飯田の大山祇神社に当たる。実頼は、その交点の東側の松山に宮都を設け、そこから見渡せる七湊一帯の水田地帯に、藤原京を模した都城を計画したものと推察される。

これに対し、直江兼続は、上杉景勝が移封した米沢にその再興の夢を描いたものと推察される。その後、徳川家康の腹心の天海僧正と通じていた堀直奇が村上城下町づくりを進める中で、城外の聖地に西奈禰羽黒神社を移転させ、その二等辺三角形を目に見える形とした。現在、西奈禰羽黒神社で村上大祭(19 台)、西奈禰神社で瀬波大祭(5 台)、岩船神社で岩船大祭(9 台)が豪華な三十三台のおしゃぎりを町中曳き回す形で行われるようになっているが、これは漸く蛭子皇子が東国三十三カ国の拠点を造ろうとした夢が、村上で一部成就しつつある姿と言える。また、京都の祇園祭は当初は六十六カ国の疫病退散を祈願して六十六の傘と鉾で行われていたが、現在は西国三十三カ国の数にされている。実頼の都城計画は、「謀は蜜なるを欲す」と言う我が国の秘密裏に行われる計画推進の中で誰にも知られることなく推移し、現在に至ったが、様々な情報が行き交い、正確な地図が手に入り、現地に車で行き易くなった中で、姿が見えるようになったものと推察される。

おわりに

平成 21 年 1 月から NHK の大河ドラマ「天地人」が始まり、直江兼続を中心とする中世の歴史的な資料の展示や催しが新潟県内各地で行われた。その弟の実頼についても色々と紹介されたが、村上の郷土資料館(おしゃぎり会館)では、「天地人特別展」が開催され、約 60 カ所の村に大國但馬守分と書かれている瀬波郡絵図が展示された。当初は、村上三大祭りで曳かれるおしゃぎりの数が三十三台であることから、その関係を整理してみるつもりであったが、瀬波郡絵図を見て大國但馬守実頼の幻の都城計画について推察し整理するに至った。今回は予想以上にその裏付けが出来たものと考えている。

謝辞

本論文をまとめるに際し、歴史的な事項についての多くはインターネットの検索で行った。大変な取り組みを行い、その結果を精査し公開されている中から、関連する知見が多数見つかり、引用させて貰った。歴史的な事実関係の部分はすべてと言って良い位それによっている。一々その URL を書ききれないので、そのことについて述べさせて貰うだけで省略するが、ここで感謝の意を表しておきたい。

参考文献

［1］岸俊男編：都城の生態　日本の古代９；中央公論社，1987（昭和 62 年）.
［2］歴史学研究会編：日本史年表；岩波書店，1979（昭和 54 年）.
［3］村上市：村上市史別編　絵図・地図・年表，2000（平成 12 年）.
［4］鈴木鉀三：村上市　歴史散歩，2002（平成 14 年）.
［5］山田雅晴編：西奈禰羽黒神社，1997（平成 9 年）.
［6］小川大介・清水光男監修：村上の祭；イヨボヤの里開発公社，1998（平成 10 年）.
［7］エリアマップ　村上市：新潟県 11；昭文社，2007 (平成 19 年).
［8］電子地図帳 ZiPROFESSIONAL7：DVD 版全国；ゼンリン，2009（平成 21 年）.